東奥日報社提供

東　奥　日　報
2017年（平成29年）6月21日　水曜日　（1）

未来の科学者を育成

小中生向け微小プラごみ調査プログラム

海洋機構、八工大開発へ

海洋研究開発機構（JAMSTEC、神奈川県横須賀市）と八戸工業大学などが、小中学生を対象とした参加型の環境教育プログラムの開発・研究に取り組んでいる。子どもたちに実際に砂浜のプラスチックごみを調べてもらい、海洋環境問題への関心を高めてもらうことで〝未来の科学者〟を育てる狙いがある。同大学の金子賢治教授と橋詰豊講師が20日、学内で会見し概要を発表した。

（新村菜穂）

このプログラムは今月米国で開かれた「国連海洋会議」で、海洋の保全を目指す「ボランタリー・コミットメント（自発的な提案）」の一つとして登録された。関係者は今後、国際展開されることを念頭にプログラムの開発を進める。

国連広報センター（東京）によると、「自発的な提案」は、国連が定める「持続可能な開発目標」の一つである「海洋・海洋資源の保全と持続可能な利用」の達成に向け、各国で行われている海洋に関する研究や事業についての情報を共有しようという取り組み。世界から1300件余りが登録されている。

調査対象は、世界規模で海洋環境への影響が指摘されている幅5ミリ以下の微小な「マイクロプラスチック」。同大教員らが連携して、調査時に使うスマホアプリなどを開発し、小中学生でも手軽に取り組めるような調査・分析方法を確立する。調査結果は、ウェブサイト上で集約・共有する。

初回調査は来年夏の予定。八戸市教委や市水産科学館マリエントが協力し、実際に小中学生にアプリを使ってもらうなどしてプログラムの改良を進める。プログラムは多言語に対応できるようにし、世界の子どもたちに自分たちの地域を調べてもらう仕組みづくりを目指す。

金子教授は会見で、マイクロプラスチックは研究が進行途中の分野だとし、「子どもたちによる調査が世界中で展開されれば（マイクロプラスチックの）生成の仕組みや防止策の研究が進む可能性がある」と期待を込めた。

会見する八戸工業大学の金子教授㊨と橋詰講師

蕪島海水浴場で見つかったプラスチックごみ。右端の容器に入っているものが「マイクロプラスチック」と呼ばれる

※「この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです」